

三春ダム流域における出水時と平水時の水質特性について

日本大学工学部 学生会員 ○木村 圭介
日本大学工学部 フェロー 高橋 迪夫
日本大学工学部 池田 宗明

1. はじめに

三春ダム貯水池では、流入する河川からの汚濁負荷物質などによる水質への影響が懸念される。流入河川においては、出水時に汚濁負荷物質の流出量が増加し、これがダム貯水池の富栄養化ならびに水質汚濁等の問題につながっている。この問題の解決にあたり、ダム流域における出水時の汚濁負荷物質の水質特性、流送特性を把握することが重要である。

本報は、福島県三春町西方地区に位置する三春ダムに流入する大滝根川本川及び支川の各地点における2009年の出水時と平水時の水質特性を検討したものである。

2. 流域概要と観測方法

三春ダム流域は、阿武隈山地のほぼ中央に位置し、郡山市、田村市（旧船引町、旧常葉町、旧大越町、旧滝根町）、三春町の2市1町にわたっている。三春ダムの集水面積は約226 km²である。集水範囲の約6割が山林で、その他の平坦部を農地と市街地が占めている。船引町では、主に葉タバコなどの農業が盛んであり、商工業都市としての発達も見られる。また、常葉町と大越町では畜産業が盛んである。

観測は、図-1に示す7地点の観測点で行い、2009年10月8日～9日の台風18号による出水時、及び2009年の平水時（6月～12月の計8回）に流量観測及び採水による水質分析を行った。また、出水時には、ろ過法によるSS（浮遊物質）の分析、浮子法を用いた流量観測を行った。

3. 観測結果及び考察

図-2は、2009年の出水時における大滝根川本川のハイドロ・ハイトグラフである。ただし、雨量は流域平均雨量を示している。また、常葉と光大寺の流量及び雨量は三春ダム管理所のデータを用いている。雨量・出水特性として雨量が短期に集中していることから、短期集中型の特性を持つことがわかる。

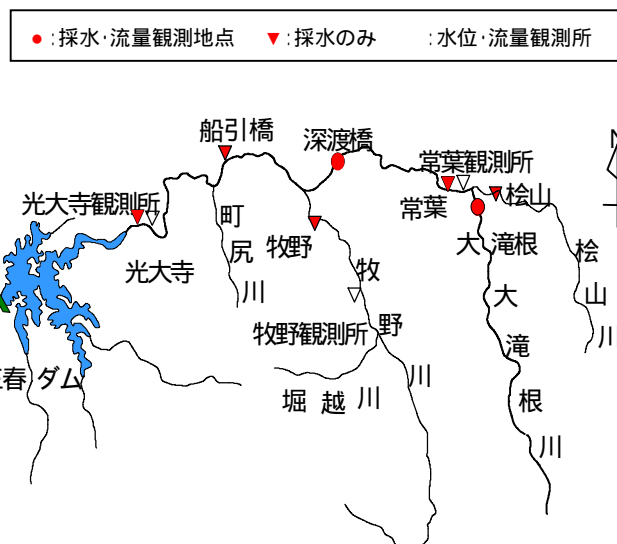


図-1 三春ダム流域平面図

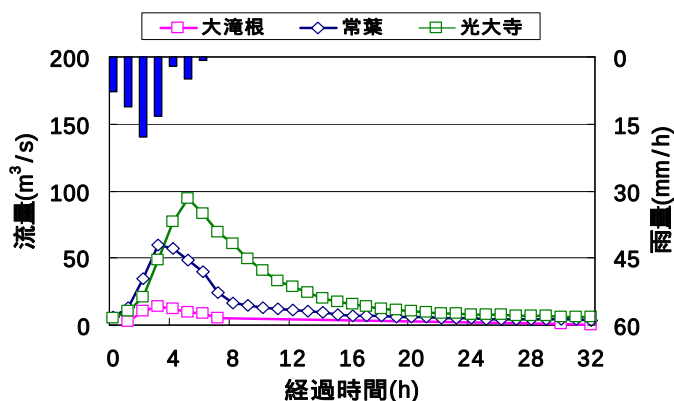


図-2 出水時のハイドロ・ハイトグラフ

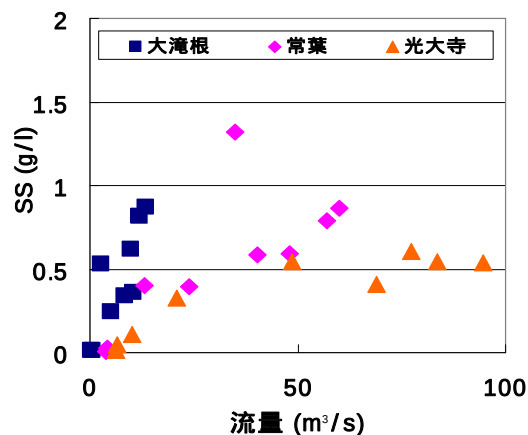


図-3 出水時のSSと流量の関係

キーワード：現地調査、ダム流域、出水、水質特性

連絡先：〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中河原1 TEL 024-956-8719

図-3は、出水時におけるSSと流量の関係を示したものである。この図から、SSは流量が増加するにつれて増加していくことがわかる。

図-4は、出水時の総窒素の経時変化を本川と支川に分けて示したものである。ここに、MIXとは採水した水をそのまま分析した値、FILTERとは採水した水を1 μ mのろ紙でろ過した後に分析した値を示している。この図から、出水ピーク時には、FILTERの値はMIXの値に比べて低くなっている。このことから、出水時には総窒素はFILTERを通過しない懸濁粒子に多く含まれていることがわかる。

図-5は、出水時の総リンの経時変化を本川と支川に分けて示したものである。この図から、総窒素と同様に、FILTERの値がMIXの値に比べ低くなっている。このことより、総リンも出水時にはFILTERを通過しない懸濁粒子に多く含まれていることが理解される。

図-6は、出水時と平水時の無機三態窒素の割合について、本川の大滝根、深渡橋、光大寺、支川の桧山、牧野の各地点の結果を示したものである。この図から、平水時には、どの観測地点においてもアンモニア態窒素、亜硝酸態窒素に比べ、硝酸態窒素の割合が非常に高くなっていることがわかる。一方、出水時には、平水時に比べてアンモニア態窒素の割合が高い。これは、出水による流域土壌の河道への流出、河床の堆積物の巻き上げなどの影響によるものと考えられる。

4.まとめ

- 1) SSは、流量が増加するにつれて増加していきことがわかった。
- 2) 出水時のT-N、T-Pは懸濁粒子に多く付着していることがわかった。
- 3) 平水時における無機三態窒素の割合は、硝酸態窒素が大部分を占めており、一方、出水時は、平水時に比べてアンモニア態窒素の割合が高くなることがわかった。

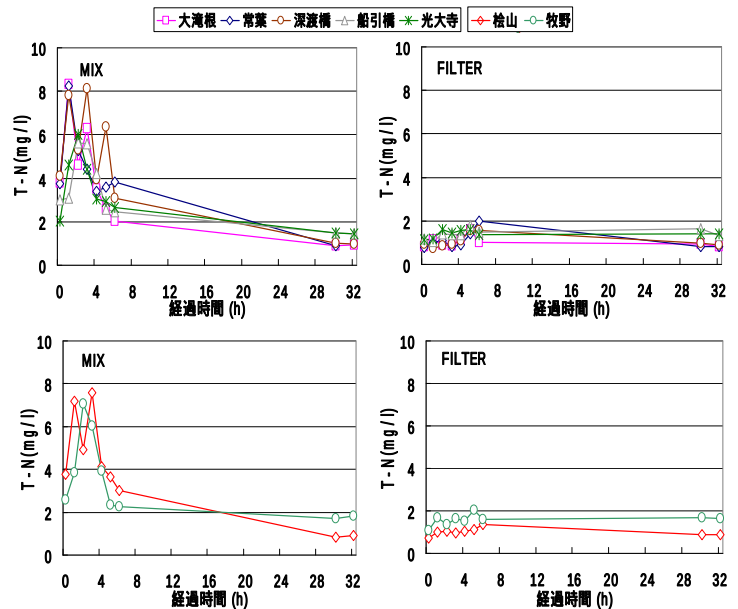


図-4 出水時の総窒素濃度

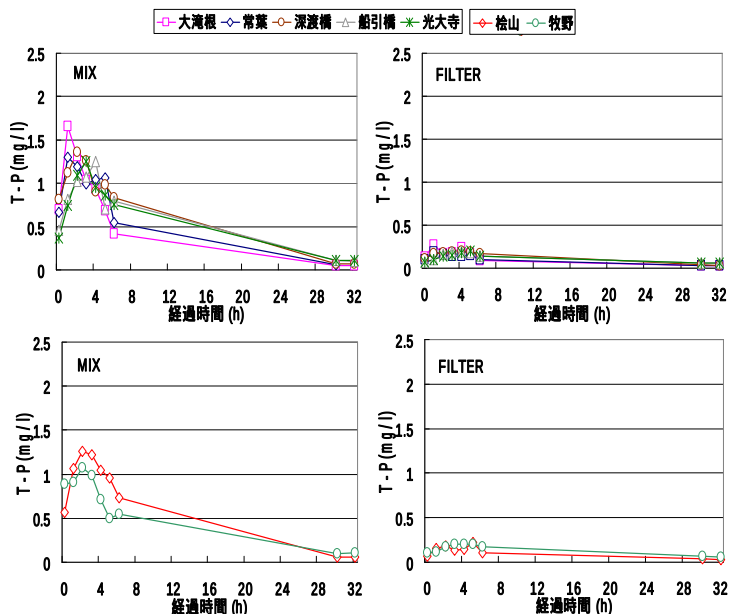


図-5 出水時の総リン濃度

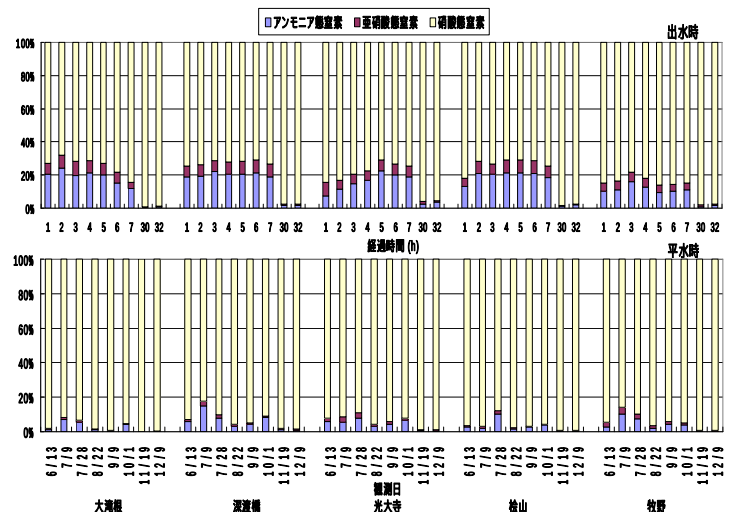


図-6 出水時と平水時の無機三態窒素の割合